

(紹介) 宮澤誠一著『近代日本と「忠臣蔵」幻想』

鶴飼政志

日本人にとって「忠臣蔵」は、もっとも好まれてきた物語であり、また日本人気質をもっとも表すものとされてきた。昨年で討ち入り以来三〇〇年が経過したが、現在でも赤穂浪士が吉良上野介邸に討ち入った一二月になると、毎年関連ドラマが放送されるなど、「忠臣蔵」人気は高い。

しかし、赤穂事件には、浅野内匠頭がなぜ吉良上野介との刃傷におよんだか、なぜ大石内蔵助たちが討ち入ったのかなど不明な点が多い。そのため、事件当時からさまざまな流言が飛び交った。このことが、後に語り継がれることになる、さまざまな「忠臣蔵」物語を創造させていった。

日本近世史家として赤穂事件を研究し、一九九九年に『赤穂浪士』紡ぎ出される『忠臣蔵』の業績がある著者は、さまざまに創造されていく赤穂事件・赤穂浪士・忠臣蔵の幻想イメージが、今日までの日本社会にいかなる影響を与えていったかに興味をいだき、本書を刊行した。専門領域を超えて、近代日本における「忠臣蔵」幻想イメージの系譜を明らかにしたのである。

「忠臣蔵」は、広く庶民に親しまれた物語である以上、通俗的な文献も数多い。そのため、歴史学者が研究対象として注目することがなかった。ゆえに、「忠臣蔵」に関する研究史の整理は、その多くは文学者や演劇研究者によって作品研究・演劇研究として行われることが多かった。

これに対して、歴史学者である著者による「忠臣蔵」整理の手法は大きく異なる。すなわち、「忠臣蔵」という幻想物語が、明治維新以降から現代まで、変遷する社会状況のなかで、いかに近代国家形成・国民像形成・戦争遂行のための精神的装置として規定され続けてきたか、数多くの文献を紹介しながら明らかにしている。

著者は、巻末において、日本社会の構造、日本人の精神構造が大きく変化した現在、もはやわれわれは、武士の美学や自己犠牲の精神といった、後世の人間による勝手な思い入れである「忠臣蔵」の幻想イメージから解放される時期にあると主張している。

また、新たな日本の社会構造、日本人の精神構造をふまえたうえで、人間の喜びと悲しみの本質を描き、時代の本質に迫る新たな歴史文学の創造を提言する。そして、歴史学者に対しては、ステレオタイプ化した日本人論を打破するために、緻密な史料実証によって赤穂事件研究に深みを加えると同時に、「忠臣蔵」の幻想イメージにメスを入れ、時代に生きる人々の精神的動態の解明をあらためて提言している。

本書が明らかにした「忠臣蔵」幻想の系譜に、今後いかなる作品が連なっていくのか、われわれの構築する現代社会の本質を問うものといえよう。

(青木書店、二〇〇一年一月刊、二八 円)

(うがいまさし)

